

## 自然の中で子どもが感じる「たのしい」を探る ～本園園外保育を事例として～

指導助言者 近藤 剛（鳥取短期大学教授）  
司 会 者 安東 裕子（愛真幼稚園）  
発 表 者 西村絵理香（愛真幼稚園）  
前嶋 美香（愛真幼稚園）  
記 録 者 井上 幸音（愛真幼稚園）

### 1. 研究の概要

#### (1) 目的

本園では「あそびの保育」と称し、自らあそびを選びだし主体的に活動する保育を実践している。その中でも、園のめざす子ども像としても掲げている「生命力、生活力に溢れた元気いっぱいの子供」、 「意欲をもって、主体的に生活を創造していく子ども」の姿の実現に向けて、自然を身近に感じ触れることができる環境を整えていくことを大切にしている。また、より多くの自然体験の場を求めて積極的に園外へも出かけている。その回数も年間約20～30回を数え、海、山、川、森の中の散策などの自然体験を通して生き生きと遊ぶ姿が多く見られている。

園外保育を計画する場合、保育者主導での立案が多くなる。園外保育を終えるたびに子ども達から「たのしかった」と声は聞かれるが、子どもにとっての『たのしい』とは一体どのようなことなのか、保育者の介入の仕方や、環境が変わることで『たのしい』という気持ちに何か変化はあるのか、園外保育活動における『楽しい』の違いや、どういう体験が子ども達の『たのしい』に繋がっているのかなど、園外保育を終えるたびに疑問に思うことが多々でてきた。

本園の特色でもある園外保育に注目し、園外保育での自然体験を通して様々な子どもが感じる『たのしい』に着目し、多くの園外保育の記録の中から子どもたちの姿、行動、言動を読みとり、今後の園外保育での自然体験がさらに楽しく魅力的なものとなるようにとの願いから本主題を設定しこの研究を進めていくことにした。

#### (2) 方法

- ①保育中の子どもの音声データの分析：5月に行った園外保育4回の活動の様子をボイスレコーダーを用いて子どもたちの声を拾い、楽しいを表現している声や言葉を見つける。
- ②保護者へのアンケートによる聞き取り：アンケートでは、子どもが自発的にどんなことを話しているのかを知るため、保護者の方には事前に子どもたちに園外保育どうだったかを聞かないでほしいことを伝え、アンケートに答えていただいた。
- ③保育形態の相違による子どもの観察：保育者が設定した園外保育と子どもと一緒に考えた園外保育では、楽しいに違いがあるかどうかを比べてみた。同じ場所鳥取出合いの森に出かけ、保育者が設定した尾根を歩く園外保育と、子どもと一緒に前もってしたいことを考えて遊んだ日を比較して行動・言動から見えてくる楽しいを探った。

### (3) 結果と考察

#### ①保育中の子どもの音声データの分析

1 回の録音時間は約 4 時間から 5 時間の 4 回分。子どもたちのたくさんの声を集めることはできたが、音声データの量が膨大のため、音声の文字化に頭を悩まされ、楽しいを探ることはできなかった。

#### ②保護者へのアンケートによる聞き取り

アンケート結果を 8 つの要素(人と一緒にする・役に立つ・面白い・成果が出る・報酬がある・適度な挑戦である・発展性がある・取り組みやすさ)に分類した。その結果を見て、子どもとの関りが深くなってきている年長だからこそ、人と一緒にするであったり人と関わったりしたことを家庭でよく話していた。そのような経験が楽しい要素になっているのだと感ずることができた。

また、報酬があるという要素にも多く分類できた。本園では山歩きのおかげでゼリ一などを持参するが、結果をみて物の報酬だけでなく頂上で見た景色や発見したという達成感や満足感があるだけでも子どもたちは楽しいを感じているのかもしれないと思うことができた。

アンケートを通して、子どもは園外保育での出来事を知らない保護者の方と共有したい気持ちがあるからこそ、家庭でたくさん話をしていることも知ることができた。園ではあまり言葉に出さない子どもたちも一人一人園外保育でいろいろなことを感じていることがよく分かった。

#### ③保育形態の相違による子どもの行動観察

子ども主導で活動を考えた時には、したいことを口々にして持ち物も何があるのかみんなで相談して確認していた。出合いの森では、広い広場を何回も走ったり、かくれんぼをしたり、虫探しをしたり思い思いに満喫している子どもたちだった。

さらに、保育形態の相違による子どもたちの行動観察を調べるために、保護者アンケートの結果を保育者が設定した園外保育と、子どもと一緒に考えた園外保育の活動に分けて分類したところ、子どもと一緒に考えた園外保育の活動をした時の方が家庭での話の中で楽しかったと言っていることがとても多かった。自分のしたいことができる、できたという主体性や達成感がこのような結果につながったのかなと感じている。

#### ④事例報告

今回の研究で園外保育後に行ったアンケートや園外保育中の子どもの姿から見えた、子どもが感じる『たのしい』がよく分かるエピソードを 2 つ紹介する。

#### 〈エピソード① 「K 君(6 歳)の見た景色」〉 エピソード記述と写真で紹介

##### 【久松山登山保護者アンケート】

- 前日の様子：準備についておにぎりの量、お茶の量、服は前日に自分で選んでいた。
- 降園後の会話：①頂上に行かないと見えない景色があるから今度一緒にいこう！②細い道やクネクネみちがある③道中出会った虫や植物の話や、頂上で食べたみんなのおにぎりの大きさや数などたくさん話してくれた。
- 前日、当日の朝、降園後の様子：普段はなかなか起きられないのに、当日の朝は朝 6 時に起きてきて、テキパキ着替えてもりもりご飯を食べていた。そして元気よく出発。帰ってから登山の話

をたくさんしてくれた。頼もしく感じた一日だった。

#### 《考察》

この度の試みで、園ではあまり話さない K 君が家庭では家族に聞いてほしくて様子を細かく話していくことを知った。はじめて登る久松山にワクワクし、大変な思いをしながら頑張って登り、頂上まで登れた達成感や喜びを感じていた。だからこそ頂上で食べたおにぎりのことや景色のことをたくさん話していたのだと思う。K 君にとって、頂上まで行かないと見ることができない景色をまた見たいと家族に伝えた行為から楽しさを感じることができた。幼児が発する「たのしかった」の背景を共有、共感することの大切さを改めて感じることができた。

#### 〈エピソード② 「やっとなんかできなかった T 君(5歳)」 エピソード記述と動画で紹介

#### 《考察》

自ら目的をもって出掛けた園外保育では、大きな声で自分の気持ちを伝え、積極的な姿を見ることができた。年中の時は、自分の思いを進んで友だちにアピールすることが少ない T 君だったので、今回の姿にとっても驚いた。したいことを自分たちで決めることで、目的が具体化されて園外保育がより楽しみになり、したいことや自分の気持ちが友だちに伝わったことで自信に溢れ、生き生きとした姿になっているのだなと思った。また、木々に囲まれた普段体験できない場所で木や葉っぱなど自然物を使い、自分で考えて遊ぶことでより、積極的になり、行動や言動から友だちと一緒に『たのしい』を感じている様子が伝わってきた。この試みを通して、改めて、子どもの『たのしい』には、主体性と協働性が大切であることを痛感した。

### (4) 今後の課題

- ・アンケートを取ってみて、子どもは園外保育での出来事を知らない保護者の方と共有したい気持ちがあるからこそ家でたくさん話をしていることも知ることができた。そして、その家で話している言葉の中に『たのしい』の要素がたくさん隠れていて、園では見えない姿を知ることができた。これから子どもと関わるときに、その時だけで捉えるのではなく、子どもたちにとって園と家庭は1つにつながる1日であるという視点も忘れず保育をしていきたいと思う。
- ・園外保育だけでなく保育の中でもそうだが、子どもたちの声をすべて聞くことには無理がある。ボイスレコーダーや動画を通して聞き逃している声がたくさんあることに気づいた。園外保育での発見や出会いを大切に、一緒に共感するためにも子どもたちの声にしっかり耳を傾け、一人ひとりと関わっていきたいと思った。また、時間に余裕をもってゆっくり活動を進めてできるだけ一人ひとりの声やサインに気づける保育でありたいと感じた。
- ・今回の研究を通して、子どもの発言や行動を『たのしい』の要素に当てはめると、子どもの感じている『たのしい』を知ることができると感じた。そして、そこで見えた『たのしい』を今後の園外保育に取り入れながらより楽しい園外保育にしていきたい。また、自然を通してたくさんの『たのしい』を感じ、豊かな感性が育まれる保育をしていくためにもこれからも子どもが感じる『たのしい』を探り続けていきたい。

## 2. 研究討議

## (1) 発表内容に対する質疑応答

Q1…研究発表の T 君の様子を見て、実際に船を浮かべたときのすごく嬉しそうな表情が、自分のやりたいことができたという達成感に満ち溢れているなというのを感じた。

川に出るのはリスクが高いが、そのあたりのリスク管理はどうされているのか？

A1…毎回園外ごとにマチコミでメールをしている。持ち物や服装や活動内容、川のこの部分で遊ぶことなど詳しく伝える。そして、園外保育に行く前は必ず下見いく。また、海と川ではライフジャケット・レギンス・マリンシューズ等を着用するが、活動する年中年長には年当初の段階で事前に準備しておいてもらうよう伝えている。

Q2…職員の方々の研修はされないか？

A2…専門の先生にお話を聞くことや、職員全体でも個人的でも研修に行くこともある。また、今日の園外保育はどうだったかなど毎日ミーティングをし、一日の保育の振り返りの共有を職員間でしあっている。

## (2) グループ討議

### ①自己紹介と発表の感想

- ・周りの環境を生かしてどう子どもたちの声を聞くか、どうやって遊びたいかという引き出しがすごいと感じた。
- ・子どもたちが主体的にできるようにと考えているが、どうしても行事などで強制してしまうことも多々あるため子どもたち主体で遊べる環境はどうやればいいのかと、考えさせてもらえた。
- ・保護者の方への連絡の使い方も分かりやすく、自分の園でも同じようなやり方ができたら保護者の方も安心するのかなと感じた。
- ・園庭にも木や実のなるものがあったり、子どもたちが自然を通して遊べたりする環境がたくさんあることを知った。遊びの中で、子どもたちはいろんな力を培っていくと思うため、自然を通して感じるものは幼少期に大きな影響を与えるんだろうなと感じている。
- ・心が動く体験が幼少期にしっかり体験できたらいいなと思い実践しているが、安全に関する配慮や知識としてなくてはならないというのは感じているため、今日の提案を持ち帰りたと思っている。

### ②自園で取り組んでいる園外での自然保育についての紹介

- ・芋の苗植えをして収穫したり、遠足に行ったりと保育者が決めたことを子どもと一緒に一学期に各学年一回ほど自然体験をしている。
- ・神社があり、そこで葉っぱに触れたり、虫取りをしたりしている。また、涼しくなってくるとお散歩カーに乗って園から 20 分程行ったところの公園にある木の迷路を走ることもしている。上の学年になると少しずつ減ってくるが、季節ごとに自然を探してみたり、さつまいも堀りや玉ねぎ堀りをしたりしている。0, 1 歳は自由性があるが、上の学年になると保育者が設定した保育になっていると思う。

- ・地域の方々がたくさん畑をされていて、お米を植える前の時期のレンゲ草畑に招いてくださり、「今週踏みつぶしていいよ」「野菜と一緒に育てよう」と言ってくださって春先に体験させていただける場所がある。

#### ③園外保育をしている中で「たのしい」と感じる言動や姿はあるか？

- ・“私のワンピース”の絵本のうさぎを印刷して服の部分を切り抜いてテープを貼ったものを持って「お花を見つけよう」と園外へ出かけた。公園自体そんなに広くない中、小さいお花を見つけたり虫を見つけたりの嬉しさに楽しさを感じていたのかなと思った。
- ・電車に乗って園外へ行った。車掌さんを見れたり、電車から海も見れたりと大人が思っている以上に子どもたちはいろんなものを発見するため、園外に出るのは特別で楽しいと感じる。

#### ④研修での気づき

- ・園庭でも虫網を使って虫を捕まえるのも、自然の生き物なのかなと思ったり、野菜を育ててみたりと意識を変えて考えてみたいと思った。
- ・あそびをどう充実させるかということを考えなくてはいけないと思ったし、子どもが園庭でしたいことや子どもの発言をしっかり聞いて遊びにつなげていけるように手助けができればいいなと思った。
- ・小さな自然からでも見つけられるように自分自身も自然に対する知識を入れつつ、子どもが気づけられるような手掛けをしていければいいなと思った。

### 3. 指導助言

今回の愛真幼稚園の取り組みは、幼児教育における「楽しさ」の概念と、それを園外保育でどのように実現するかということについての研究であった。子どもたちの「楽しい」という感情を研究しようとしたこと、それは、「楽しい」ということは当たり前のように思われがちだが、実際に子どもたちが何を楽しいと感じているかを科学的に検証する価値は大いにあると考える。保育者として、当然のことではなく、実際に一人ひとりの子どもたちが何を楽しいと感じているのかに視点をもって取り組んだことがこの研究の意義深さである。保育の質の保障に繋がる研究であり、子どもの育ちや保護者からの信頼にも影響する重要なテーマである。また、経験予測だけでなく、科学的な根拠に基づいた保育実践からの追求は「楽しさ」の概念の構築に大切な過程である。

研究方法については、ボイスレコーダーによる記録、保護者からの聞き取り、動画撮影など複数の方法を組み合わせて多面的に子どもたちの「楽しさ」を捉える試みだったが、分析計画については再考の余地があったと思う。4～5時間の記録を全て分析するには膨大な時間も必要になり不可能に近い。特定の場面に焦点を当てるなど効率的な方法も検討されともっとよかったと思う。研究結果を指標化し、新人保育者の指導などに活用されることも大変有意義な研究になると思う。

この試みによって、子どもたちの「楽しさ」が活動の「開始時」、「ピーク時」、「終了後」で異なる要素がみられたことは大変興味深いポイントである。それぞれの段階で表情や会話、振り返

りなどの異なる表現方法があることも分かった。また、保護者との協働性も重要であることが示唆された。保護者を通じて子どもたちの「楽しい」という感情をより多く引き出せるのではないかとということも調査をして(アンケートをしてみないとわからなかった気づき)明らかに示されていて、その点では大きな成果となったと思う。

最後に、子どもたちの「やりたい」という気持ちについて、運動能力の発達においても、子どもたち自身が「遊び」と認識している活動の方が効果的であるという研究結果があることを紹介したい。子どもたちの「自己効力感」(セルフエフィカシー)を高めることが大切である。子どもたちが安心できる範囲から少しずつ挑戦の幅を広げていくことの大切さ、山登りなどの活動が目的なのか手段なのかを明確にし、子どもたち一人ひとりの成長に合わせた段階的な挑戦を設定することにも取り組んでみてほしい。達成体験、代理的体験、言語的説得などを通じて、子どもたちが「できる」と思える環境づくりを今後も職員間で試行錯誤しながらそれぞれの園が構築していつてほしい。

